

# エコマップを活用した支援の展開

## ～その人らしい生活の実現に向けて～

磯采花 薄井詩織 富山美咲 藤田真衣果

### 1. はじめに

私たちは、利用児・者の主体性を尊重した支援方法を学ぶという目標のもと、社会福祉援助技術現場実習Ⅰ（以下、実習とする）を行った。個々の体験を話し合う中で、私たちは、社会資源の活用に興味を抱いた。なぜなら、利用児・者がその人らしく地域の中で暮らしていくためには、ソーシャルワーカーがいかに利用児・者を取り巻く環境を理解し、その人に合った社会資源を適切に活用していくことの重要性を考えたためである。

そこで私たちは、ソーシャルワーカーが社会資源を把握する際に用いるアセスメントシートを見直した。しかし、社会資源の項目にはばらつきがあり、情報が把握しづらかった。そのため、社会資源の項目をまとめたエコマップを活用することで、利用児・者と利用児・者を取り巻く環境の関係を第3者が見ても、一目でわかりやすくなり、情報共有がしやすくなるのではないかと考えた。さらに、研究を進めていく中で、ソーシャルワーカーは、社会資源を活用していく中で、利用児・者の思いを取り入れていくことができたなら、その人らしさを尊重したよりよい支援につながるのではないかと考えた。

本研究を通して社会資源の情報提供を行うカンファレンスの場において、エコマップを活用しながら、その人らしい生活を実現していくための支援について考えていきたい。

### 2. 研究方法

- ①実習での体験をグループで話し合う
- ②個々の体験をもとに、共通点を見つける
- ③グループでの共通点をもとに、どこに焦点をあてるか話し合う
- ④今までの学びや参考文献を利用し、情報収集を行う
- ⑤考察をもとに、グループとしての研究が妥当か確認する
- ⑥決定した焦点にそって研究を進める
- ⑦今までの学びや参考文献と比較し、考察する
- ⑧自分たちの体験を振り返り、自己評価を行う
- ⑨今後の課題について考え、現場での実践につなげる

### 3. 先行研究

#### (1) 【社会資源の定義】

その大小を問わず、一定の生活課題を解決したり、特定の目標を達成するために、動員、使用、活用される道具的、手段的価値物を社会資源という。

#### 【社会資源の種類】

- ① 公的な社会資源
- ② 非営利の社会資源
- ③ 営利の社会資源
- ④ 個人に関する社会資源

さらに、ワーカーは、利用者の内的資源を、フォーマル、インフォーマルな社会資源（外的資源）と同様に活用していくことを心がけていく必要がある。

（参考文献：社会福祉士養成講座編集委員会(2015)『新社会福祉士養成講座 6 相談援助の基盤と専門職 第3版』中央法規）

#### ⑤ 内的資源

- ・熱望一意欲・目的・野心・希望・夢
- ・能力一技能・才能・素質・知識
- ・自信一力・影響力・自分に対する信頼

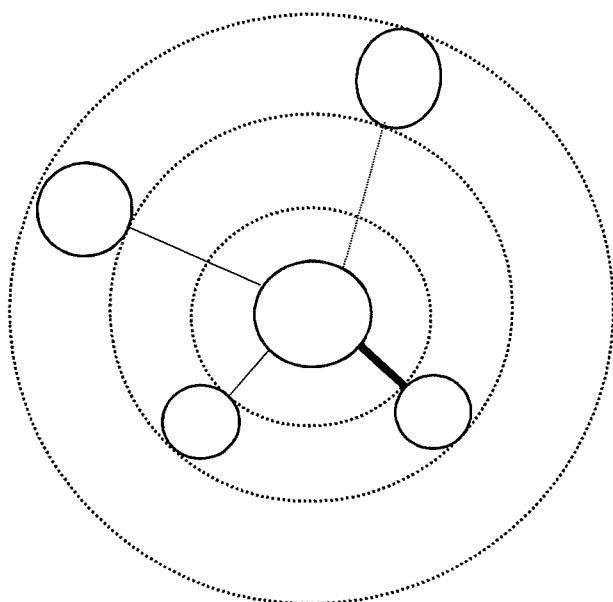
（参考文献：社会福祉士養成講座編集委員会(2017)『新社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規）

これまでの学びの中で、アセスメントでの情報分析の際、利用者のストレングスにも着目することが重要であると学んできた。また、利用者のストレングスには、①性格、②才能・技術、③関心・希望、④環境・社会資源があることを学んできた。これらのことから、私たちは、先行研究であげた内的資源を利用者のストレングスと捉えることとする。

私たちは、福本幹雄氏の『エコ・マップを活用したソーシャル・ワークの展開』(2002年)という論文をもとに、【エコマップの課題】を次のようにまとめた。

## (2) 【エコマップの課題】

- ①マッピングの継続性
- ②エコ・マップに質的内容が描けない
- ③現場におけるケース記録あるいは内部資料として、マップの各資源に対して、担当者  
の名前を入れるようにすると、継続する情報や状況が把握しやすい。
- ④マップ中の関係線の描き方の工夫、線の太さを変える等、線の数量化ができないか、  
そうすることによって統計がとれる可能性がでてくる。
- ⑤カテゴリー化して資源毎に⑥円環に書き入れていく(案)。(図-1参照)
- ⑦個人の持っている特性(生態特性、生活特性、生活歴等)の表現ができないか、  
個別性にも関連している。



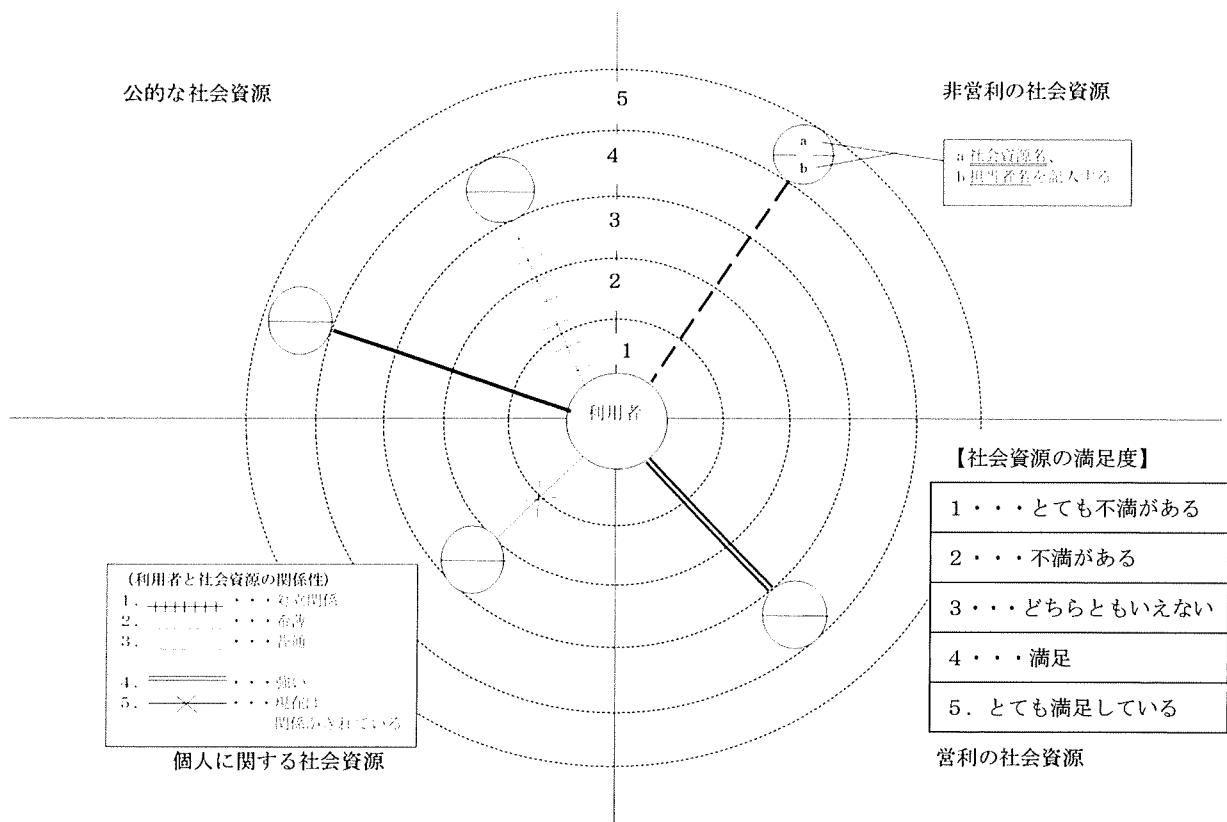
(図-1) エコ・マップ(ECO-MAP)のカテゴリー化(案)

(参考論文:福本幹雄『エコ・マップを活用したソーシャル・ワークの展開』佛教大学大学院紀要 第30号、2002年、p239)

## 4. 先行研究の考察

私たちは、社会資源には外的資源のほかに内的資源があり、どちらも支援の中で活用することが重要になることを理解した。エコマップの課題を改善していくことで第3者から見ても利用者の生活全体をよりわかりやすく示すことのできるエコマップができるのではないかと考えた。そこで、(図-2)のようなエコマップを作成した。

(図一2 エコマップ)

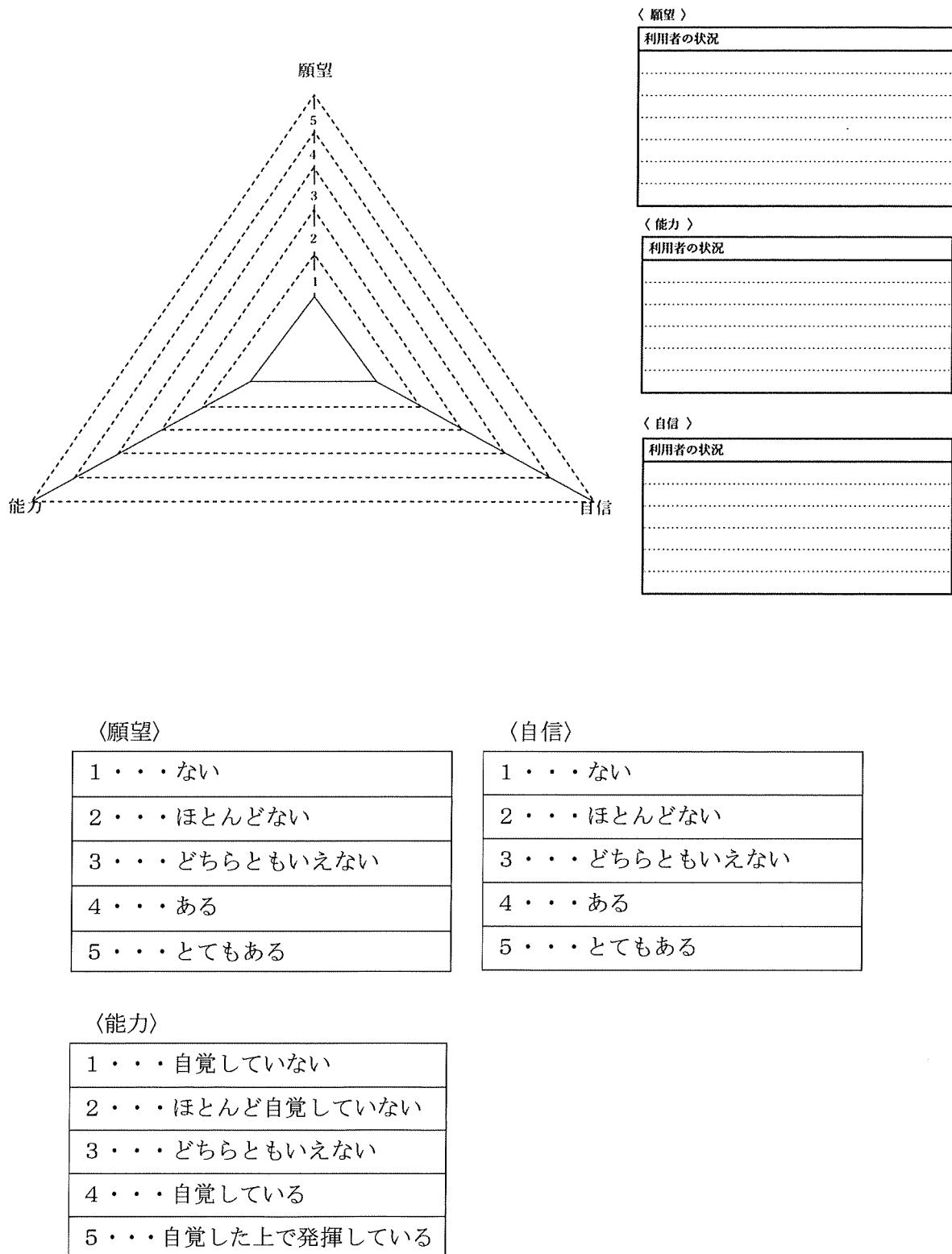


先行研究であげた【エコマップの課題】をエコマップに取り入れることで、視覚的に利用者の状況を把握しやすくなるのではないかと考えた。

- ①継続性……………利用者の現状況を記したエコマップと支援計画を基にした  
エコマップの2種類をカンファレンス毎に提出することとする。
- ②質的内容……………質的内容を利用者の満足度と捉えることとする。
- ③担当者の名前……社会資源名を入れる丸枠の中に、担当者の名前の欄を設けた。
- ④線の数量化……………利用者と社会資源の関係性を表す線の種類を5段階で示すこととする。
 

1 ++++++ (対立関係)	2 _____ (希薄)
3 _____ (普通)	4 = (強い)
5 →×← (現在は関係がきれている)	
- ⑤カテゴリー化……社会資源を公的な社会資源、非営利の社会資源、営利の社会資源、  
個人に関する社会資源の4つにカテゴリー化した。
- ⑥円環……………②質的內容(満足度)を1～5の5段階で円環に示すこととした。
- ⑦個別性……………願望、能力、自信などの通常エコマップでは表すことの難しい内的資  
源に特化した内容を別紙で図式化する。(図一3)

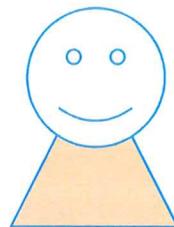
(図一3 ストレングスマップ)



## 5. 仮事例

### 【設定】利用者Aさん(以下、Aさんとする)

- ・一人暮らしの82歳女性
- ・夫は1年前に他界
- ・軽度の認知症
- ・娘がいるが遠方に住んでいるため疎遠  
娘はAさんと対立関係にありAさんへの協力を拒否
- ・社交的で近所付き合いが多くあった
- ・ADLの低下により歩行に不安がある



### Bケアマネジャー

- ・女性
- ・地域包括支援センターのケアマネジャー
- ・Aさんを担当することとなる

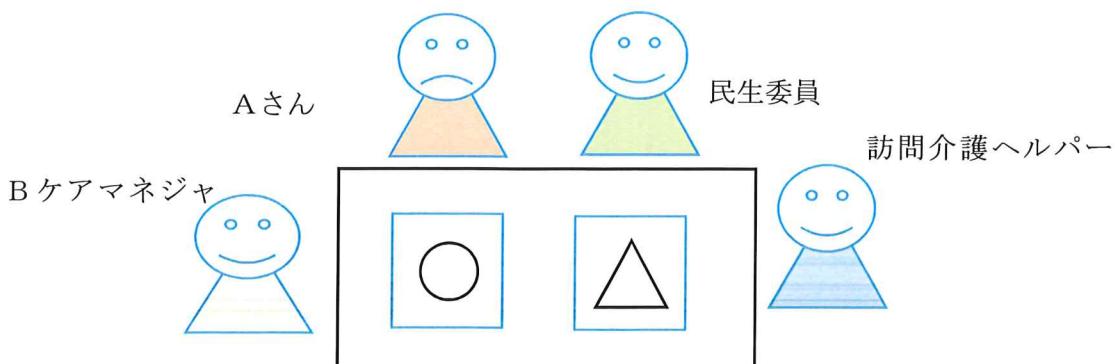


### 〈支援が開始となるまでの経緯〉

Aさんは、1年前に夫に先立たれたのを機に、ふさぎこむようになり、近所の人も見かけることが少くなっていた。ある日、Aさんの自宅でぼや騒ぎが起こった。近所のCさんが発見し、大事にはいたらなかったが、Aさんを心配したCさんは地域包括支援センターのBさんに相談をした。これをきっかけに、BケアマネジャーはAさんの支援を開始した。

### 【場面1－1】初回カンファレンス

Bケアマネジャーは、Aさんの情報収集を行った。Aさんのアセスメントを行う中で、Aさんは夫が亡くなってから外出することが減ったり、そのことで他者とのつながりが途絶え、希薄になっていることがわかった。家にいることが多くなったことで、Aさんの身体機能は低下し、Aさんは歩くことに不安を抱いていた。また、Aさんには軽度の認知症の症状がみられた。そして、生活に対する意欲もみられなかった。そのためBケアマネジャーは、Aさんの情報をエコマップとストレングスマップにまとめた。また、支援計画をまとめたエコマップを作成した。そしてカンファレンスを行った際に、Aさんと出席した専門職に提示した。



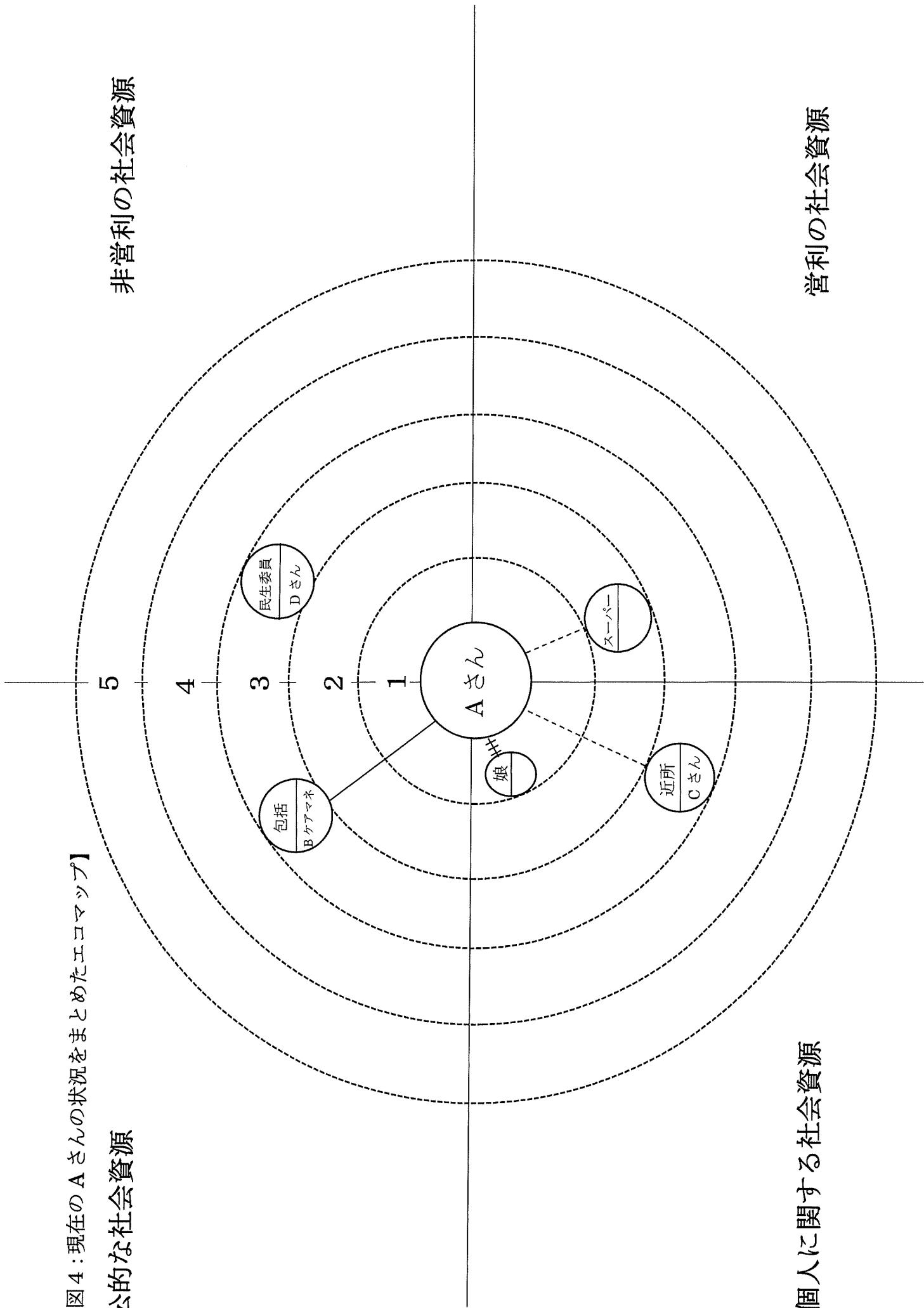
【図4：現在のAさんの状況をまとめたエコマップ】

公的な社会資源

非営利の社会資源

個人に関する社会資源

営利の社会資源



【図5：ストレングスマップ】

〈願望〉

利用者の状況

「この歳になって、特にやりたいことも見つからな  
いわ。」とお話されていた。  
生活に対する意欲も低下しているご様子であった。

〈能力〉

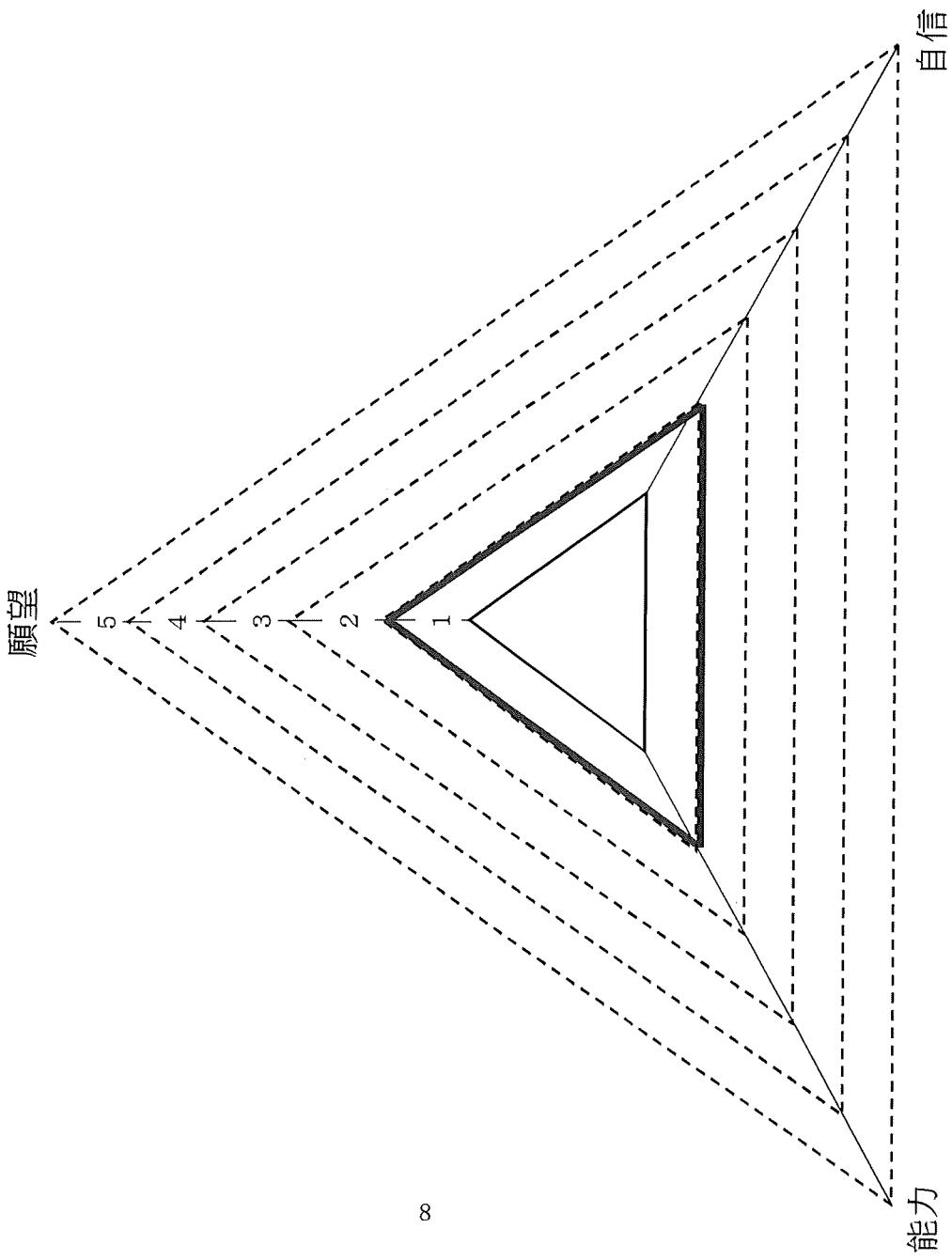
利用者の状況

「何もできない。」、「思うように体が動かないし、  
何をやっても無駄。」とお話されていた。

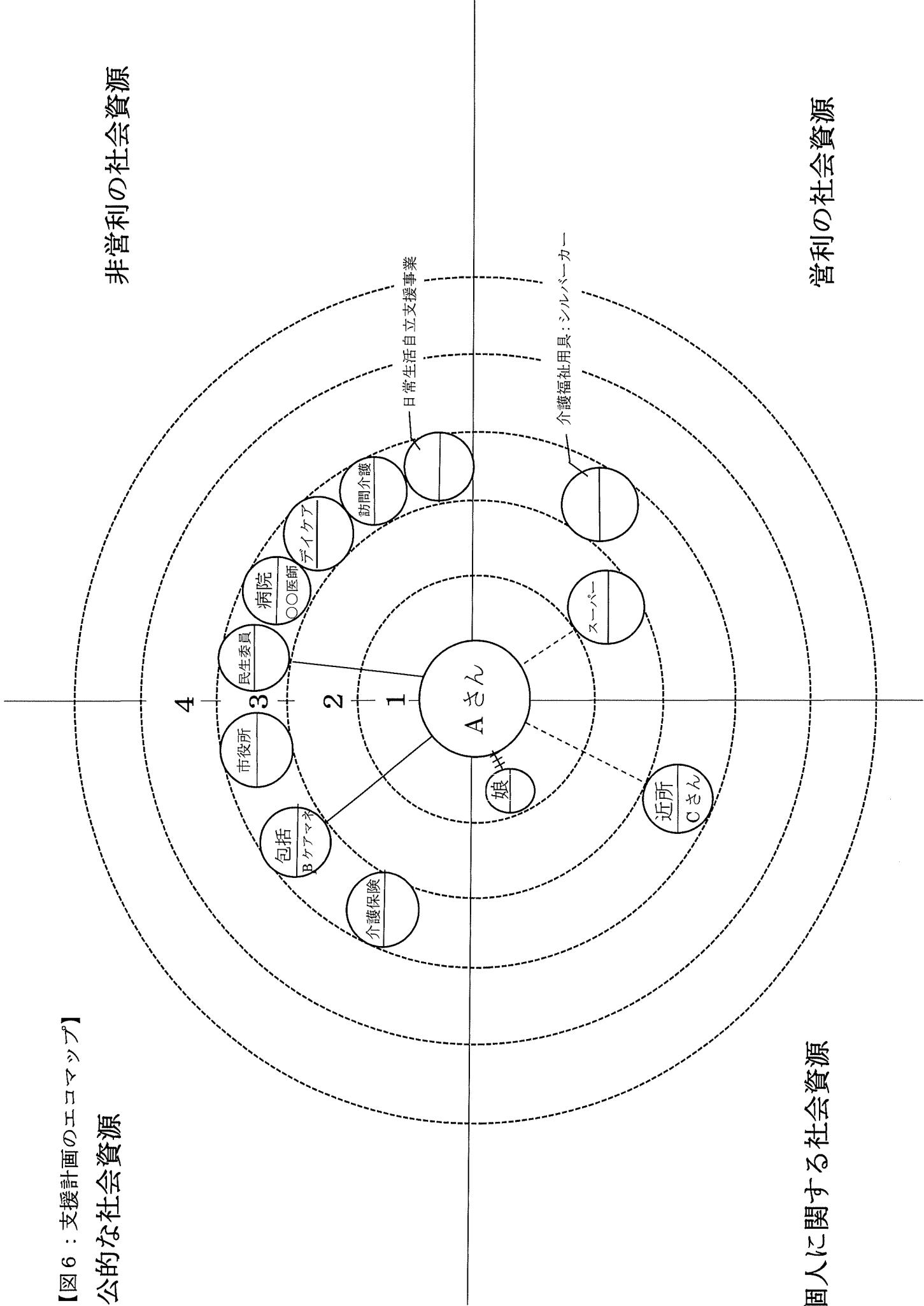
〈自信〉

利用者の状況

「もう歳だから……」とお話されていた。  
自信を失っているご様子がみられた。



【図6：支援計画のエコマップ】  
公的な社会資源



### 【場面1－2】初回カンファレンス後の支援

BケアマネジャーはAさんの情報収集をもとに、今後、Aさんが日常生活自立支援事業や介護保険などのサービスを利用しやすいように、行政機関などを中心とした支援計画を立てた。支援計画を実施した後、Aさんは介護保険を申請し要支援1に認定された。そして、在宅サービスを活用しながら生活を送っていた。しかしAさんの活用している社会資源には公的な社会資源、非営利な社会資源に偏りがあった。

デイケアでのリハビリを中心にAさんの身体機能は改善しているようであった。そのことによって、人と話ができたらいいなと外出したいという気持ちや、他者と関わりたいという意欲を話す場面が見られた。



### 【場面1の考察】

Bケアマネジャーが作成したエコマップから、Aさんと繋がりのある社会資源との関係性の強さやカテゴリーには偏りがあることがわかる。

私たちが作成したエコマップを活用することで、利用者と社会資源との関係性や社会資源がバランスよく活用されているかなどの情報を視覚的に把握しやすい。そのため、カンファレンスの際にも、出席者はAさんの状況を一目で把握しやすくなり、Aさんのよりよい支援に向けた情報共有などが有効になることにも繋がるのではないかと考える。

③担当者の名前……社会資源名を入れる丸枠の中に、担当者の名前の欄を設けること

サービス担当者の情報や状況が把握しやすくなった。

④線の数量化……利用者と社会資源の関係性を表す線の種類を

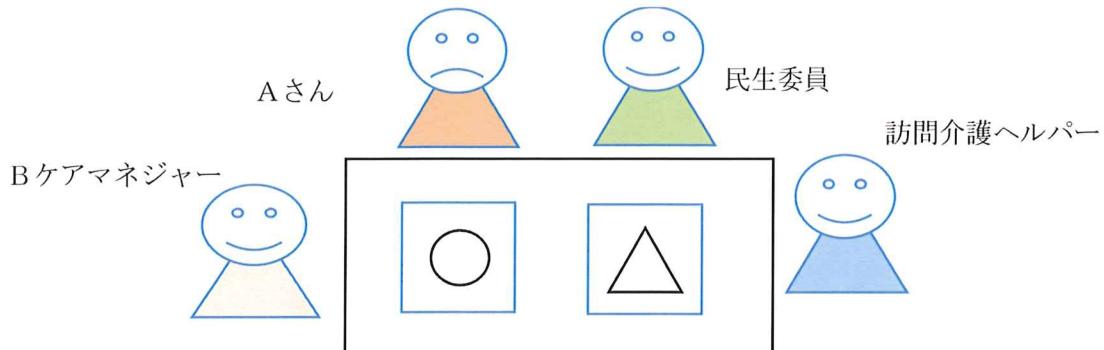
1 ++++++ (対立関係)、 2 \_\_\_\_\_ (希薄)、 3 \_\_\_\_\_ (普通)、  
4 \_\_\_\_\_ (強い) 、 5 —X— (現在は関係がきれている)  
5段階で示すことで、Aさんと社会資源の関係性を視覚的に把握しやすくなった。

⑤カテゴリー化……社会資源を公的な社会資源、非営利の社会資源、営利の社会資源、個人に関する社会資源の4つにカテゴリー化することで、社会資源がバランスよく活用されているか判断しやすくなった。

### 【場面2－1】2回目カンファレンス

その後、Bケアマネジャーは、Aさんの2回目のカンファレンスを設定した。

カンファレンスに向けて、BケアマネジャーはAさんの情報収集・モニタリングを行った。Aさんの情報収集・モニタリングを行う中で、Aさんの身体機能が改善してきたことから、外出したいという気持ちや他者と関わりたいという意欲を持っていることがわかった。そのため、Bケアマネジャーは、Aさんの現在の状態をエコマップとストレングスマップにまとめた。また支援計画をまとめたエコマップを作成した。そしてカンファレンスを行った際に、Aさんと出席した専門職に提示した。



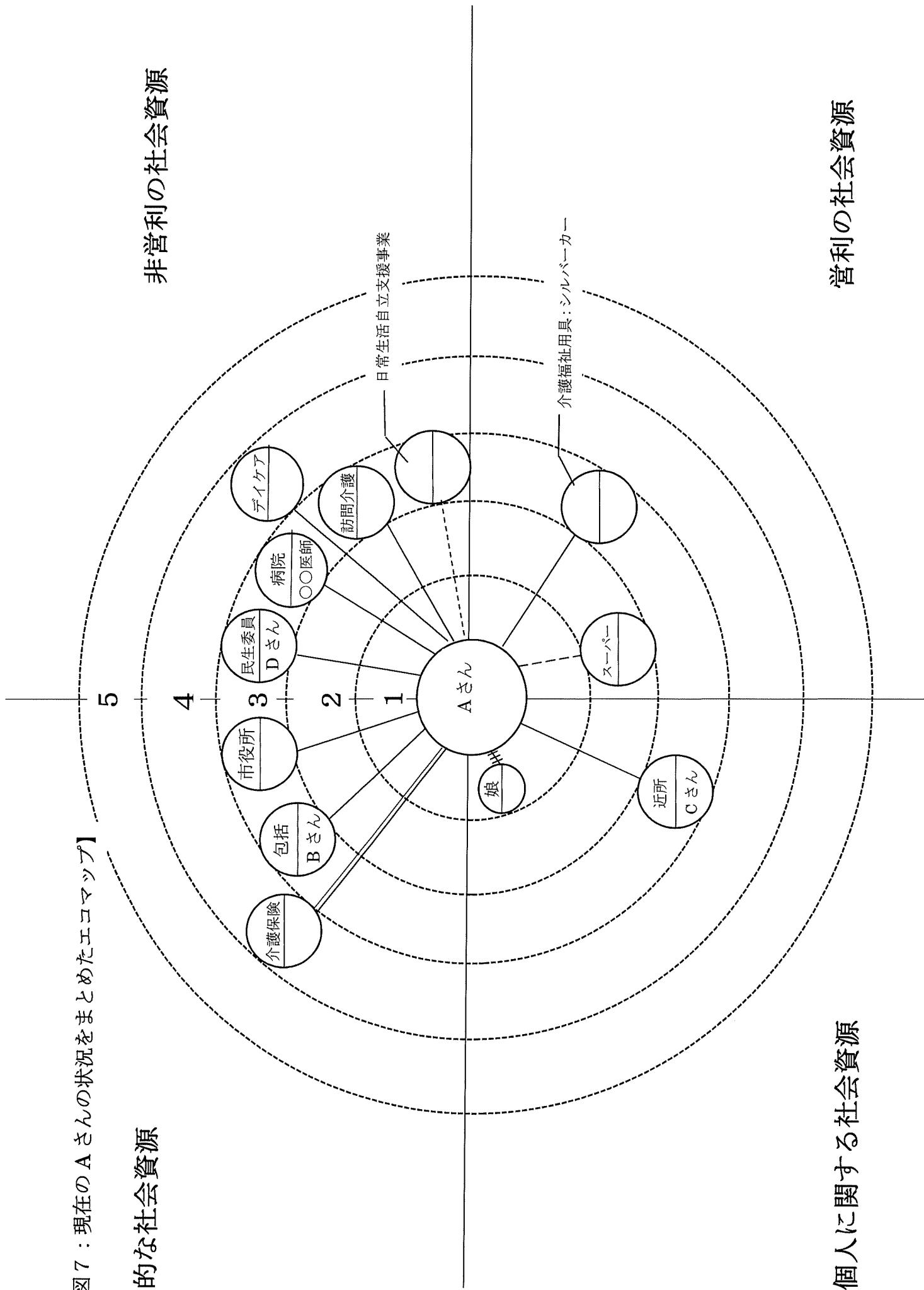
【図7：現在のAさんの状況をまとめたエコマップ】

公的な社会資源

非営利の社会資源

個人に関する社会資源

営利の社会資源



【図8：ストレングスマップ】

〈願望〉

利用者の状況

「身体もちょっと動くようになってきたから少し外に出たり、普段みたいにご近所さんと話ができるようになったらいいな。」とお話をされていた。

前回よりも前向きな言葉が多くなった。

つよい願望はみられなかつた。

〈能力〉

利用者の状況

「デイケアを利用する中で、徐々に身体を動かすことが苦ではなくなってきた。」とお話をされていた。

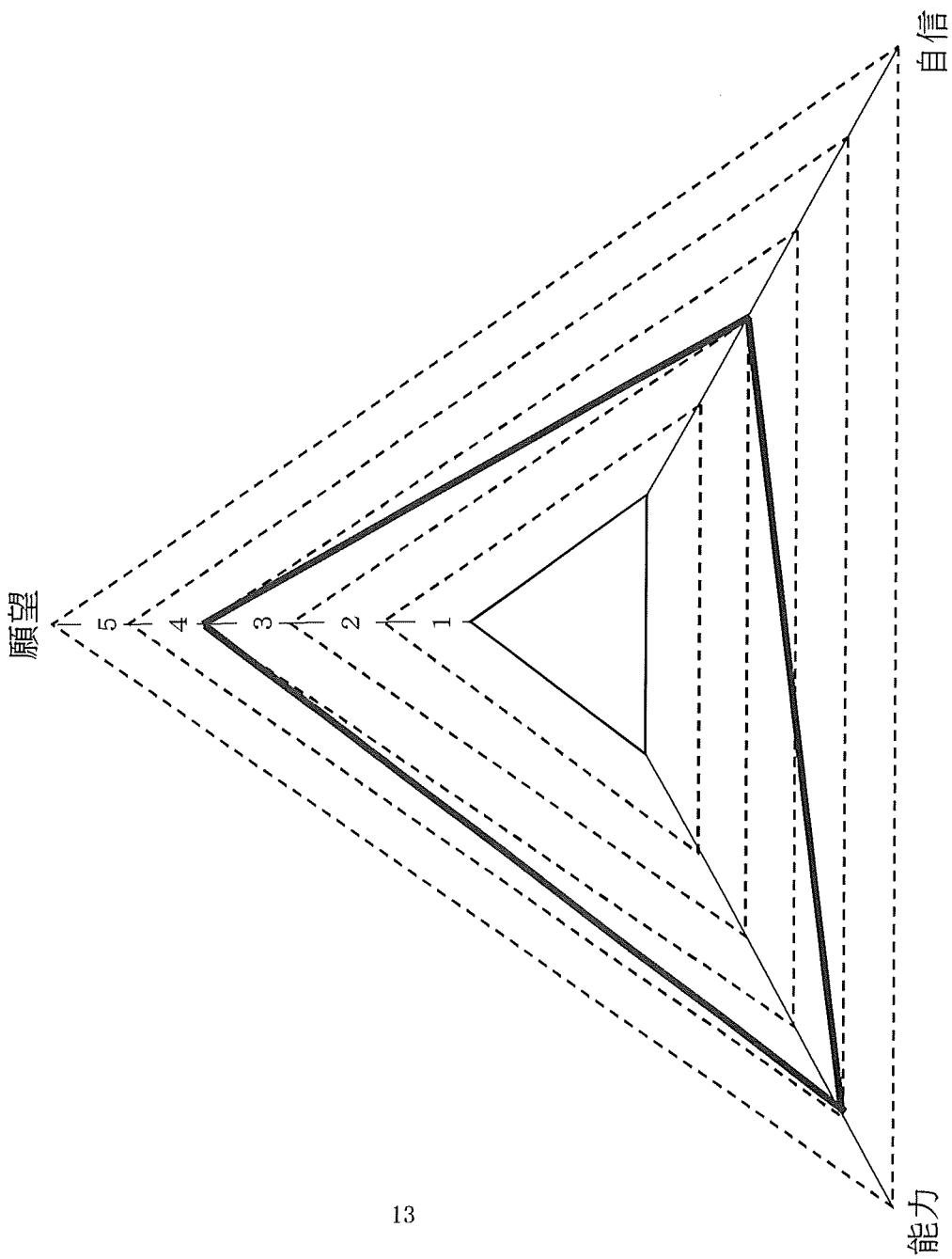
「ヘルパーに助けてもらひながらであつても、自分にできることはある。」とお話をされていた。

少しずつではあるが自分のできることを生活の中で発揮しているご様子である。

〈自信〉

利用者の状況

「少しは身体が動くようになってきたけど不安は大きい。」とお話をされていた。病気が進むにつれて、他人に迷惑をかけてしまうのではないかと心配しているご様子であった。



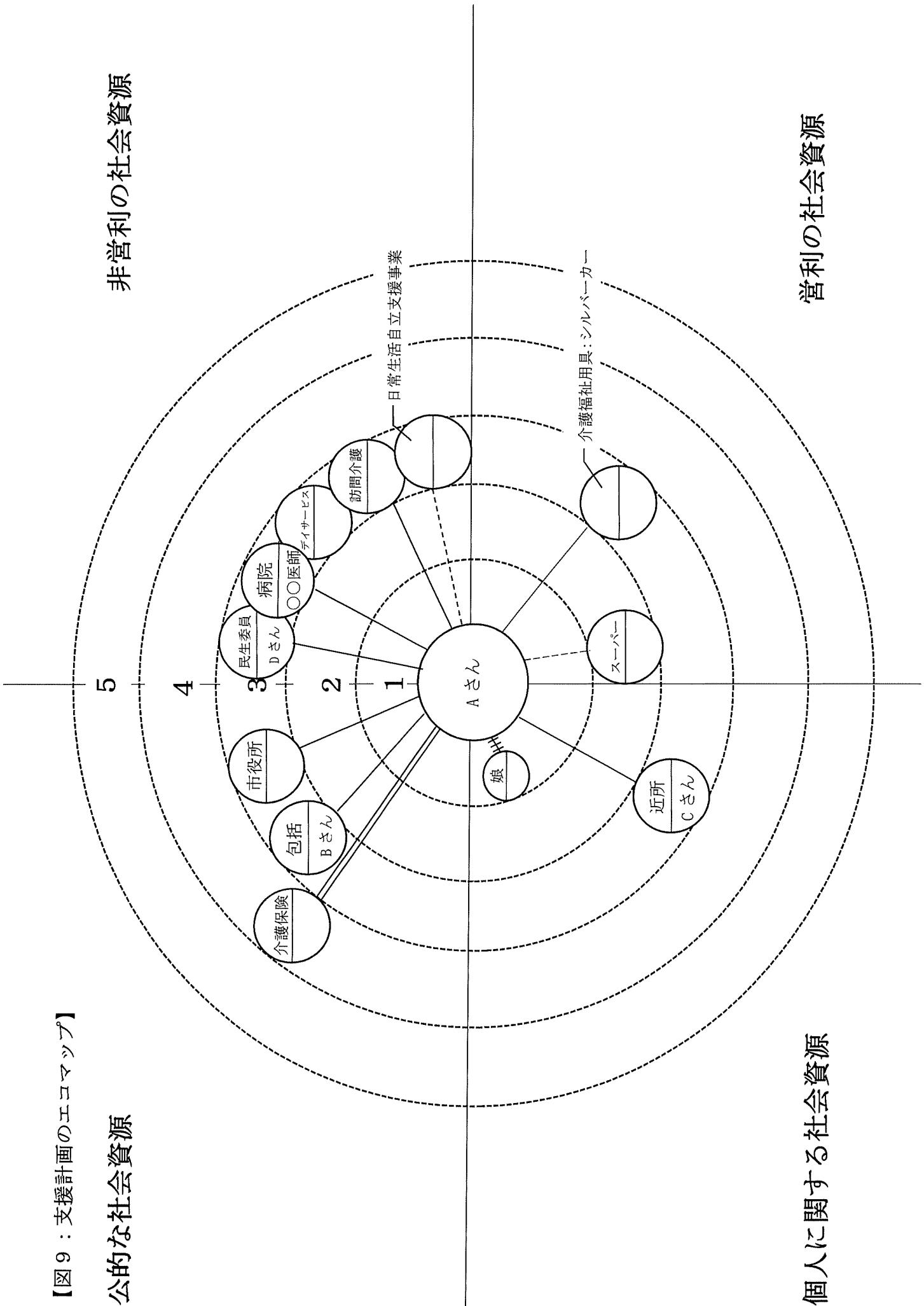
【図9：支援計画のエコマップ】

公的な社会資源

非営利の社会資源

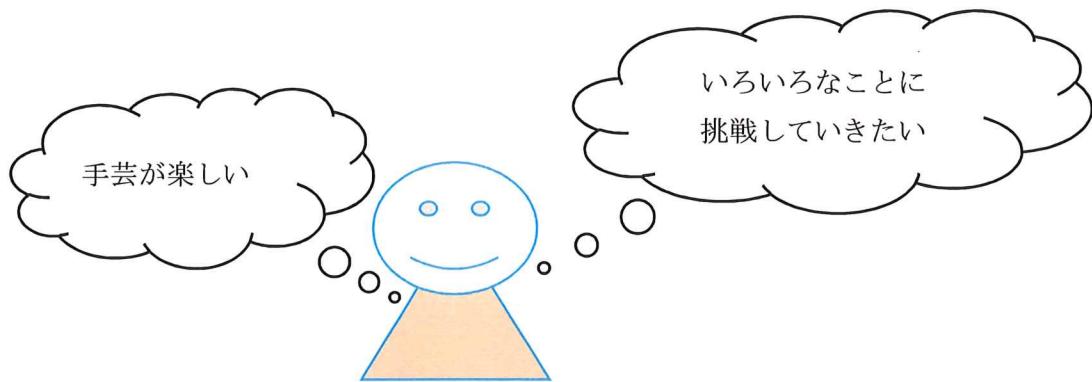
個人に関する社会資源

営利の社会資源



### 【場面2－2】2回目カンファレンス後の支援

支援計画を実施した後、Aさんはデイサービスを利用しながら生活を送っていた。Aさんはデイサービスで出会った友人を通して始めた手芸を楽しんでいる様子であった。またAさんは趣味を楽しんだり、友人や地域の人との関りを通して、生活に意欲が生まれた。また、家事も自分の力ができるようになったと感じていると話し、以前よりも日常生活を送ることに願望、能力、自信が見られた。



### 【場面2の考察】

場面1では、利用者の満足度を表すことができていなかったが、支援の経過とモニタリングを通して、利用しているサービスへの満足度が円環により視覚的に明らかになった。

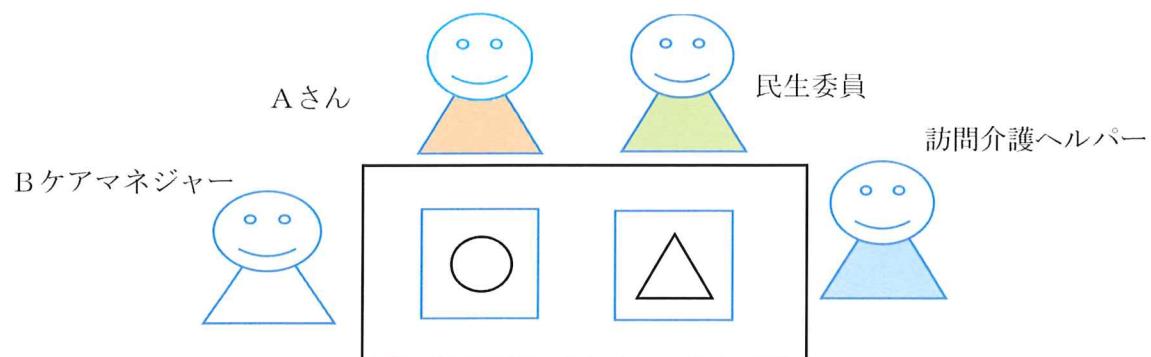
支援の経過とともに、利用者の思いなどに変化が現れ、ストレングスマップの欄に利用者の現在の、願望・能力・自信に関しての思いを細かく書き示している。そうすることによって、グラフではわからない利用者の思いに気づくことができ、デイケアからデイサービスへと支援の変更を行うことに至るなど、利用者に合った社会資源とつなげやすくなつた。

②質的内容・⑥円環…従来のエコマップでは表せなかつた利用者の満足度を表すことが可能になつた。

⑦個別性…………願望、能力、自信などのエコマップでは表すことのできない内的資源に特化した内容をストレングスマップに書き示したことで、利用者の思いをカンファレンスの場で視覚的に伝えることが可能になつた。

### 【場面3－1】3回目カンファレンス

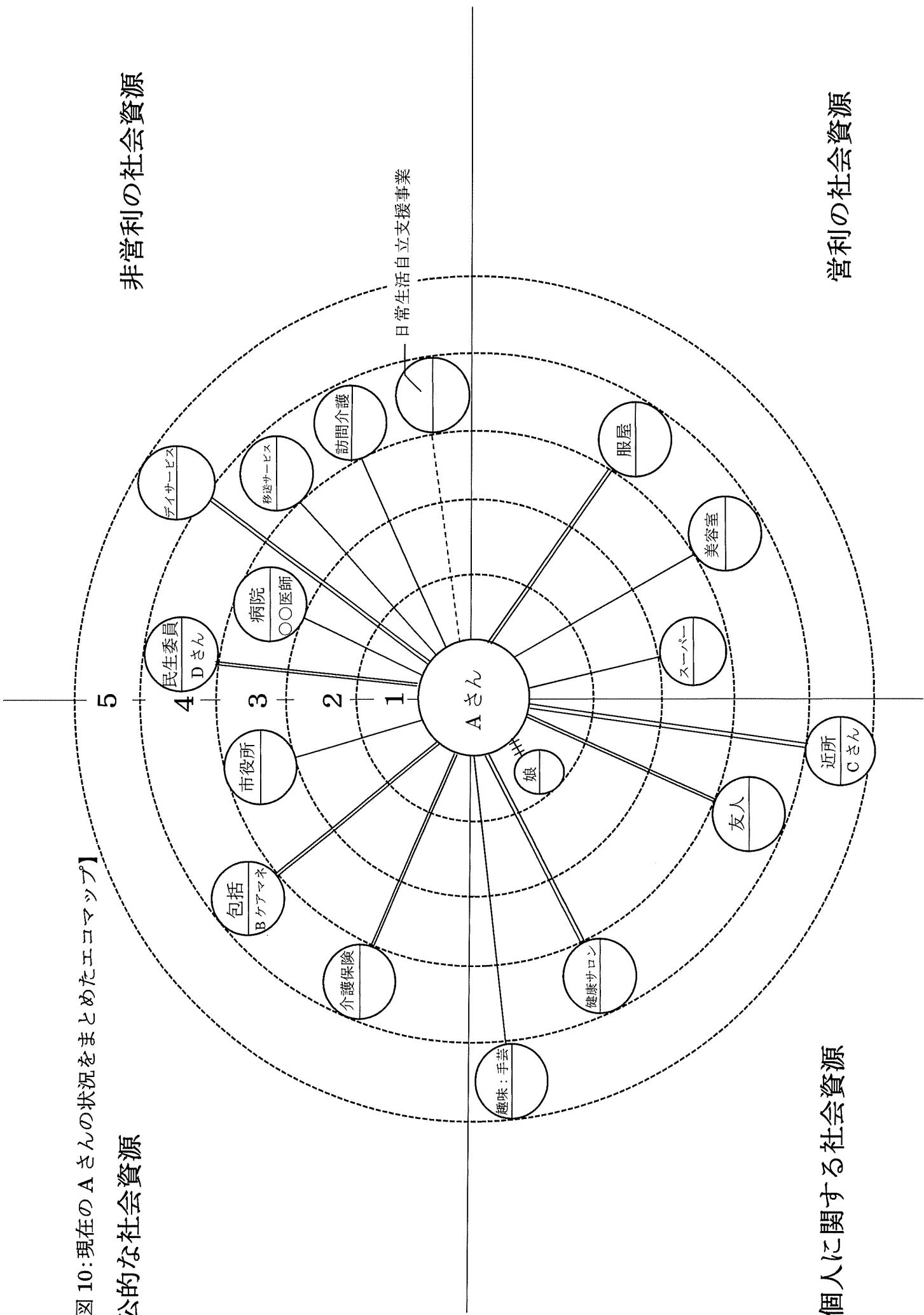
Bケアマネジャーは、Aさんの3回目のカンファレンスを設定した。カンファレンスに向けて、Bケアマネジャーは、Aさんの情報収集・モニタリングを行った。Aさんの情報収集・モニタリングを行う中で、自分でできることができ少しづつ増えてきたことがわかった。また、他者との関りが増え、以前は希薄であった人間関係が徐々に回復してきたこともわかった。そのため、Bケアマネジャーは、Aさんの情報をエコマップとストレングスマップにまとめた。また、支援計画をまとめたエコマップを作成した。そしてカンファレンスを行った際に、Aさんと出席した専門職に提示した。



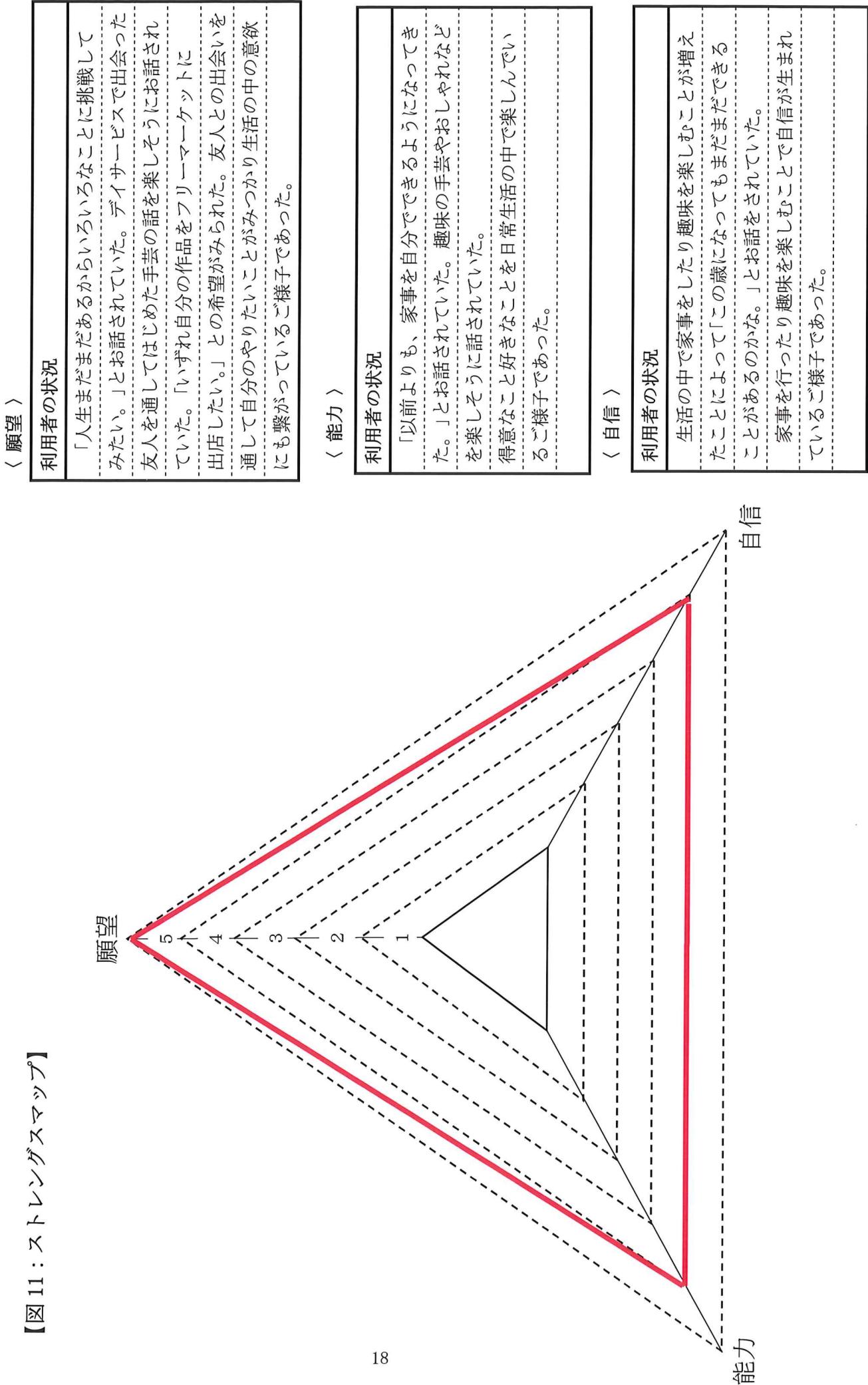
## 常利の社会資源

## 個人に関する社会資源

【図10】現在のAさんの状況をまとめたエコマップ  
公的な社会資源



【図11：ストレングスマップ】



【図12：支援計画のエコマップ】

非営利の社会資源

5

公的な社会資源

4

3

2

1

Aさん

日常生活自立支援事業

地域での月1のバザー

営利の社会資源

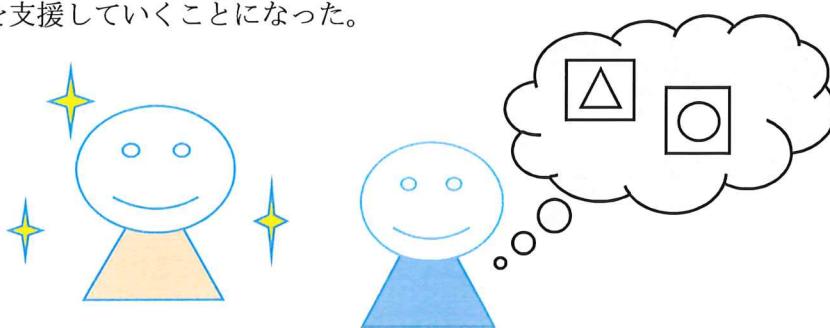
個人に関する社会資源

### 【場面3－2】Aさんの今後

Aさんは在宅サービスを利用しながら、一人暮らしを継続させている。自分でできる家事を意欲的に行ったり、趣味を通して目標も生まれた。人との関りが増え、社交的で近所付き合いが多くあったAさんらしさを取り戻しつつある。

Bケアマネジャーは今後、Aさんと対立関係にある娘さんと連絡をとり、娘さんの意向も聞きながら、Aさんの生活や支援について考えていく予定である。その中で認知症が進行していくことや、身体機能が低下する可能性があることも考えながら、日常生活自立支援事業の利用を視野に入れた調整を行っていくことを予定している。

そして、Bケアマネジャーはこれからも、エコマップとストレンジスマップを活用しながら、Aさんの生活を支援していくことになった。



### 【場面3の考察】

その後も、Aさんへ社会資源マップとストレンジスマップを活用し、Aさんの主体的な生活へ向けてさらなる資源の調整が図られることとなった。

社会資源マップとストレンジスマップを活用することで、第三者が見てもひと目で利用者の社会資源を把握しやすくなったのではないかと考える。同時に、利用者の内面的な部分に目を向けて、新たな資源の調整を行うことが可能となったことがわかる。

- ①継続性……………利用者の現状況を記したエコマップと支援計画を基にしたエコマップをカンファレンス毎に提出することとする。毎回利用者のエコマップとストレンジスマップを作成しカンファレンスに提出することで継続性を成立させた。

## 6. 総合的な考察

私たちは、エコマップを活用した支援の展開について研究するために、エコマップの課題をもとに仮事例を進めてきた。そこで、本研究を通し利用者の外的資源だけでなく内的資源にも着目することで、利用者の状況に合わせて社会資源を活用することが可能になると考えた。

なぜならば、一般的に使用されているエコマップには、利用者の環境をシートに整理す

る際に、利用者の願望・能力・自信などの内的資源は入らない。そのため、エコマップを見た際に、利用者と結びつきのある社会資源は視覚的に把握しやすいものの、利用者本人の状態は把握しにくいことがわかったからである。

そのため私たちは本研究において、エコマップの課題をもとに一般的なエコマップでは図式化されることのない利用者の満足度やストレングスなどの内的資源を取り入れた新たな形のエコマップを作成した。外的資源とともに内的資源を図式化することができたならば、利用者の状況を一目で把握しやすくなり、利用者一人ひとりの状況をイメージしやすくもなるため利用者に合わせて社会資源を有効に活用することが可能になるのではないかと考えたからである。

仮事例を通して、社会資源を活用するまでのソーシャルワーカーの役割について利用者を取り巻く環境の中の活用されている資源、活用されていない資源、利用できない資源にいかに気づき働きかけていくかが大切だということを理解した。また、利用者のその人らしい生活の支援を行っていくために、ソーシャルワーカーは利用者の環境全体を見ながらも、利用者の個性を活かしていくことを忘れてはいけないことに気づいた。

そして本研究を通して私たちは、利用者のよりよい生活の支援を行う一つの手段として、新しい方法を開発できたのではないかと考える。

将来、私たちは、今回の研究を活かし、その人らしい支援の実現に向けて、専門的なソーシャルワーカーの知識を活かすと共に、利用者らしさというものを常に考えながら、支援していきたい。そして、利用者のためによりよい支援を目指して、向上心を持ち続けていけるソーシャルワーカーになりたい。

## 7. おわりに

本日は、お忙しい中私たちの発表を最後まで聞いてくださり、ありがとうございました。私たちのグループは、全員同じゼミ生であったため話しやすい雰囲気の中、お互いに意見を出し合いながら真剣に研究に取り組むことができました。しかし、自分たちが納得のいく研究に辿りつくまでには、なかなか思うようにいかないことも多くありました。苦しい時でも、じっくりと時間をかけて研究に取り組むことが、私たちらしい進め方でもあり、グループの色でもありました。しかしそれが時には仇となり、夜遅くまで大学に残ったり、メンバーの家で合宿しながら研究を進めた時もありました。それでも、グループ全員が“自分たちだけにしかできない研究をしたい”という共通の目標があったため、くじけずにここまで来ることができたのだと思います。

無事に報告会を迎えることができたのは、実習を受け入れてくださった実習担当職員をはじめとする実習先職員の皆様、施設や病院で温かく向かい入れてくださった利用児・者の皆様、患者の皆様、そのご家族の方々のおかげです。また、時には厳しく、時には優しくご指導してくださった実習担当教員の方々、私たちのことを温かく見守りながら、陰で様々なサポートをしてくださった実習担当助手の方、研究の進め方で行き詰っているとき

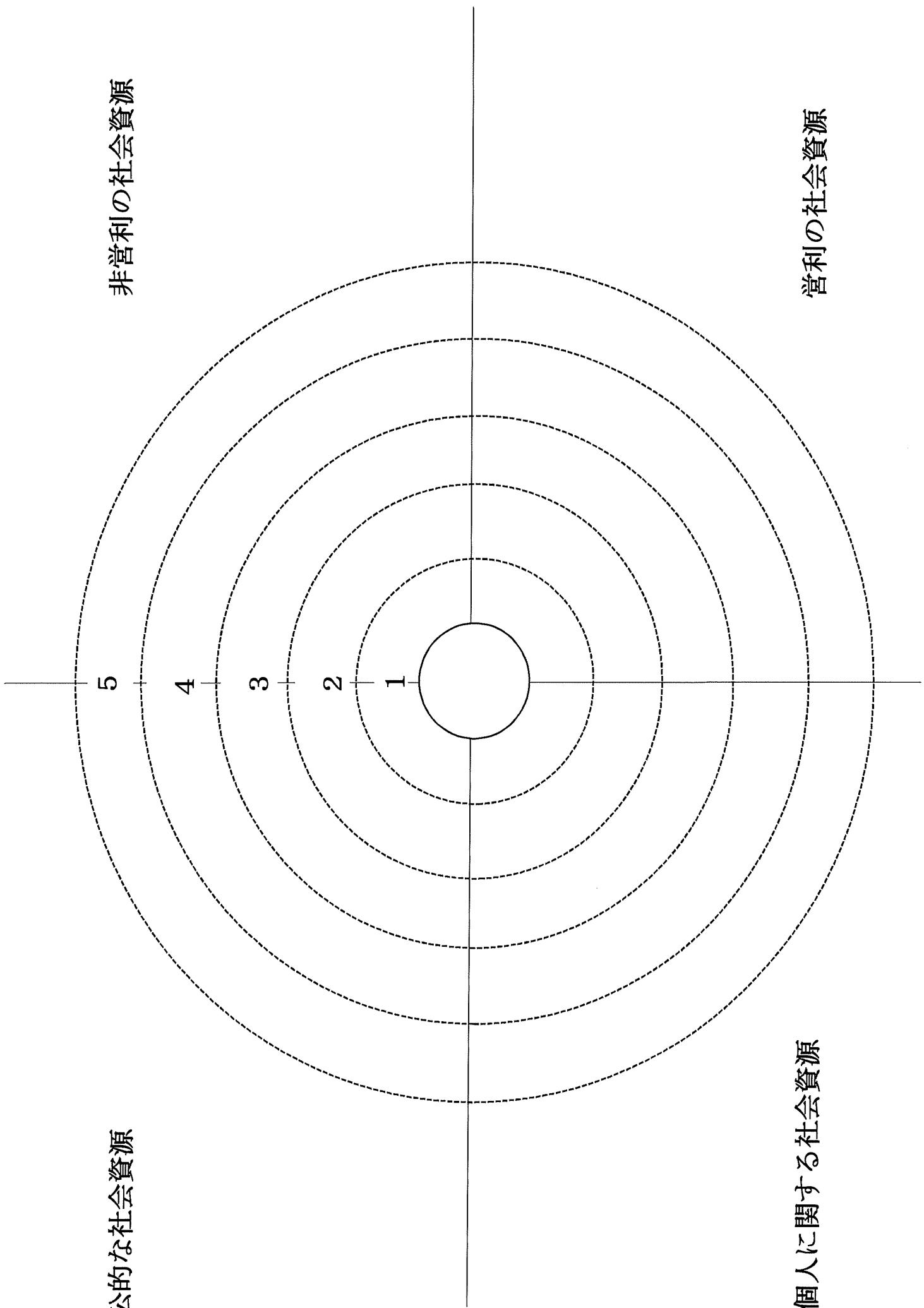
に優しくアドバイスしてくださった先輩方、報告会のために準備をしてくれた後輩たちがいたからこそ、ここまで来ることができました。本当にありがとうございました。そして、帰りが遅くなても温かいご飯を作つて帰りを待つてくれたり、実家に帰るたびに頑張ろうと勇気をくれた家族は、とても大きな心の支えとなっていました。私たちに、福祉という誇りある専門的な学びの環境を与えてくれた家族には、本当に感謝しています。

最後に、一年間同じ実習生として、たくさんのつらいことを一緒に乗り越えてきた仲間たちには、感謝しきれないほどのありがとうございます。仲間がいたからこそ、“最後までやり抜こう”という気持ちになりました。

そして、“あきらめずに進めば必ず達成できる”、そう実感させてくれた一年間だったと思います。今後は、ソーシャルワーカーを目指す受験生として、国家資格合格に向けて頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

## 8. 参考文献

- ・社会福祉士養成講座編集委員会(2015)  
『新社会福祉士養成講座 6 相談援助の基盤と専門職 第3版』中央法規
- ・福本幹雄『エコ・マップを活用したソーシャル・ワークの展開』佛教大学大学院紀要  
第30号、2002年、p239



〈 軽望 〉

利用者の状況

〈 能力 〉

利用者の状況

〈 自信 〉

利用者の状況

